

太平洋漂流実験50日

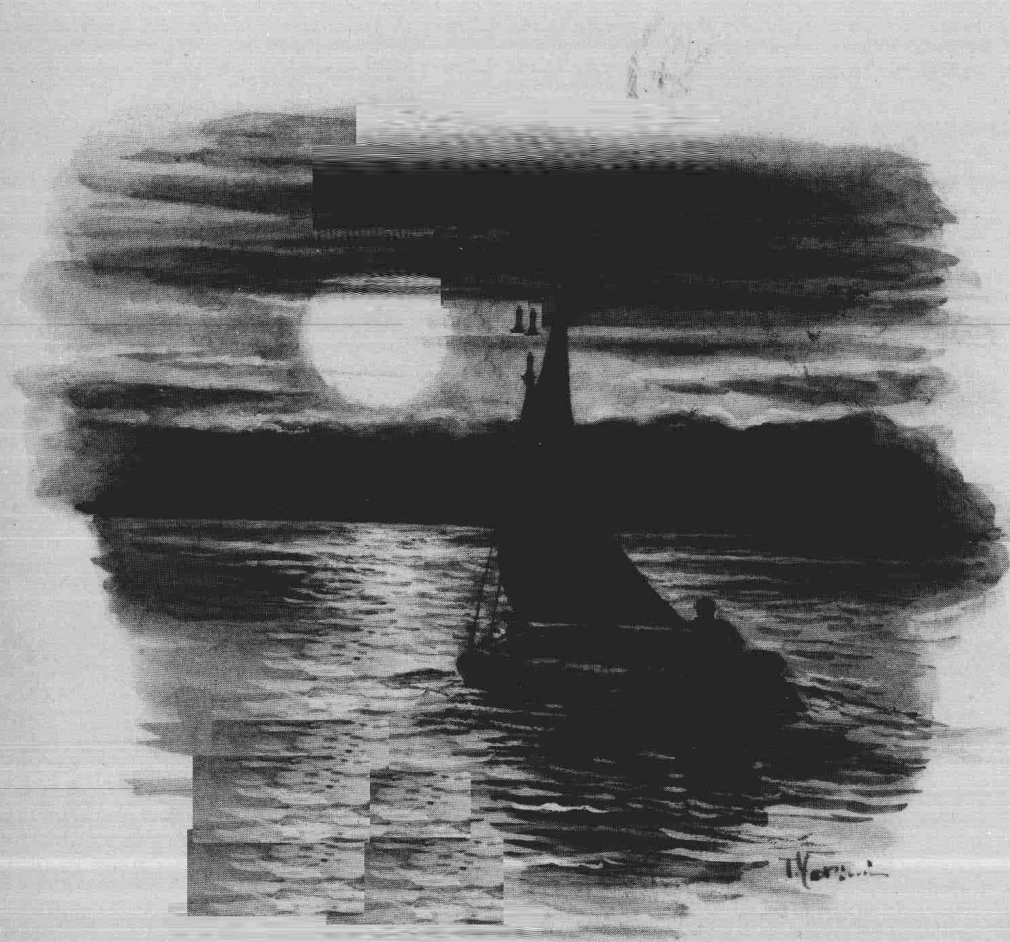
著 実 藤 齊
画 隆 依 光



ハルノ実験50日

斉藤 実 著
依光 隆 画

ノンフィクション
●●ブックス●●



童心社

<著 者>

齊藤 実 (さいとう みのる)

1931年千葉県に生まれる。中央大学経済学部卒業。記録映画監督。現在、漁船船員の労働と海難の実態、交通事故の悲惨さを中心に追求している。著書には『漂流実験』『悲しみの海』（海文堂）などがある。

連絡先 東京都練馬区豊玉北5-26-16吉岡方

<画 家>

依光 隆 (よりみつ たかし)

1926年高知県に生まれる。大連美術学校油絵科卒業後、高村光太郎氏に師事。出版美術家連盟会員。少年文芸作家クラブ会員。現在、雑誌・週刊誌などのさし絵に活躍中。『宇宙英雄・ローダンシリーズ』（早川書房）、『あの日の空は青かった』（金の星社）などの作品がある。

現住所 東京都中野区中央3-24-15-901

NDC558

©1980

200p 21.6×17.6cm

8356-570108-5253

Printed in Japan

ノンフィクション・ブックス

太平洋漂流実験 50日

一九八〇年四月二五日 第一刷発行 ©

著 者 齊藤実
画 家 依光隆

発 行 所 株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町22

電話 〇三―三五七―四一八一

振替 東京 一七五五〇四

印 刷 新興印刷製本株式会社
平 版 株式会社サン印刷所
製 本 株式会社難波製本

まえがき

齊藤 実

「みやげ、いっぱい買ってくつからな！」

家族の見送りをうけ、船が港をでていった。それから何十日かして、とつぜん、SOSの無電。海上保安庁の巡視船や仲間の船の懸命な搜索にもかかわらず、板切れ一枚も発見できなかった。こうして、船の遭難で死亡する者は年に日本の船員で五百人前後。船から転落したり、病氣になつたりして死亡する者が、やはり五百人前後。海上労働者の死亡率は、陸上の産業の二十倍といわれている。しかも、遺体さえ発見できないことが多い。それだけに、のこされた家族の悲しみは、私たちが想像する何十倍も深い。

この人たちを救う方法はないだろうか。巡視船や仲間の船に見はなされても、自分の力で生きてかえってくる方法はないだろうか。この思いにとりつかれたのが昭和四十年。それからきょうまで、私は、自から海の漂流者を志願し、四回の漂流実験をおこない、延七十日間も太平洋で漂流した。その結果、絶対に飲んではいけない、といわれている海水も真水を混ぜれば、安全であることがわかった。釣った魚だけでも、何十日も生きられることがわかった。ゴムボートでも帆をはれば、ヨットのように走れることもわかった。風速六十メートルの嵐の海でボートが転覆。それでも、私は生きてかえってきた。この本は海難者を救うため、文字通り漂流に命を賭けた私の体験記だ。

もくじ

まえがき 1

第四次漂流実験 ひかりうづじつけん

漂流前夜の恐怖 まうふ 8

サイパンから漂流始まる 11

なぜ漂流実験をやるのか

二名の漂流船員の死 16

ボンパール説と世界の定説 ていせつ 22

漁船船員の洋上生活 29

海難遺族の悲しみ かいなんいぞく 39

海難遺児の作文 46

漂流実験の足跡 そくせき

第一次漂流実験 52

51

15

7

第二次漂流実験 66

第三次漂流実験 68

第四次漂流実験の目的

ヘノカツバII世号の性能 82

頭だけで二食分あるシイラ 90

飲料水流失 93

恵みの雨 97

漂流航海術 99

りこうな魚

化けの皮 106

コガネアジとカワハギ 111

魚肉ばかりで困ったこと 114

漂流中の生活

ナギの日 118

シケの日 121

漂流一か月前後 124

117

105

81

台風二十号との闘い 131

台風二十号発生 132

はじめてのごはん 134

台風二十号襲来天幕完破 138

風速六十メートルの海で転覆 145

幻覚症状と悪夢 154

世界最悪の漂流 161

生還 171

最後の一秒まで生きる努力 172

あらわれた救助船 175

入港 180

世界の定説への挑戦 183

闘病生活 184

第五次漂流実験 188

あとがき 195

解説 197

太平洋漂流実験50日

第四次漂流実験



漂流前夜の恐怖

東京から南へ二四〇〇キロ、南海にうかぶ小島が観光で有名なグアム島。そのグアム島を最南端としてロタ、サイパン、テナン……とつらなるちいさな島がある。マリアナ諸島だ。

ここには、忘れられない、おおきな海難事件があった。

昭和四十年十月七日、マリアナ諸島北部のアグリガン島近海で、静岡県しずおかの遠洋カツオ船が台風の直撃をうけ、七隻遭難、二〇九名の命がうばわれた。マリアナ海難とよぶ。

それから十年目の昭和五十年十月七日を第四次漂流実験開始の日と決め、九月二十四日、私は一人、サイパンへやってきた。連日、四十度近い炎熱地獄の中、漂流ボートの整備をおこなった。

そして、十月六日午後七時、漂流前夜、千葉県印旛郡栄町にすむ兄に別れの電話をした。

「あす、正午、予定通りサイパンから漂流をはじめます。」

「えっ、なあに？」

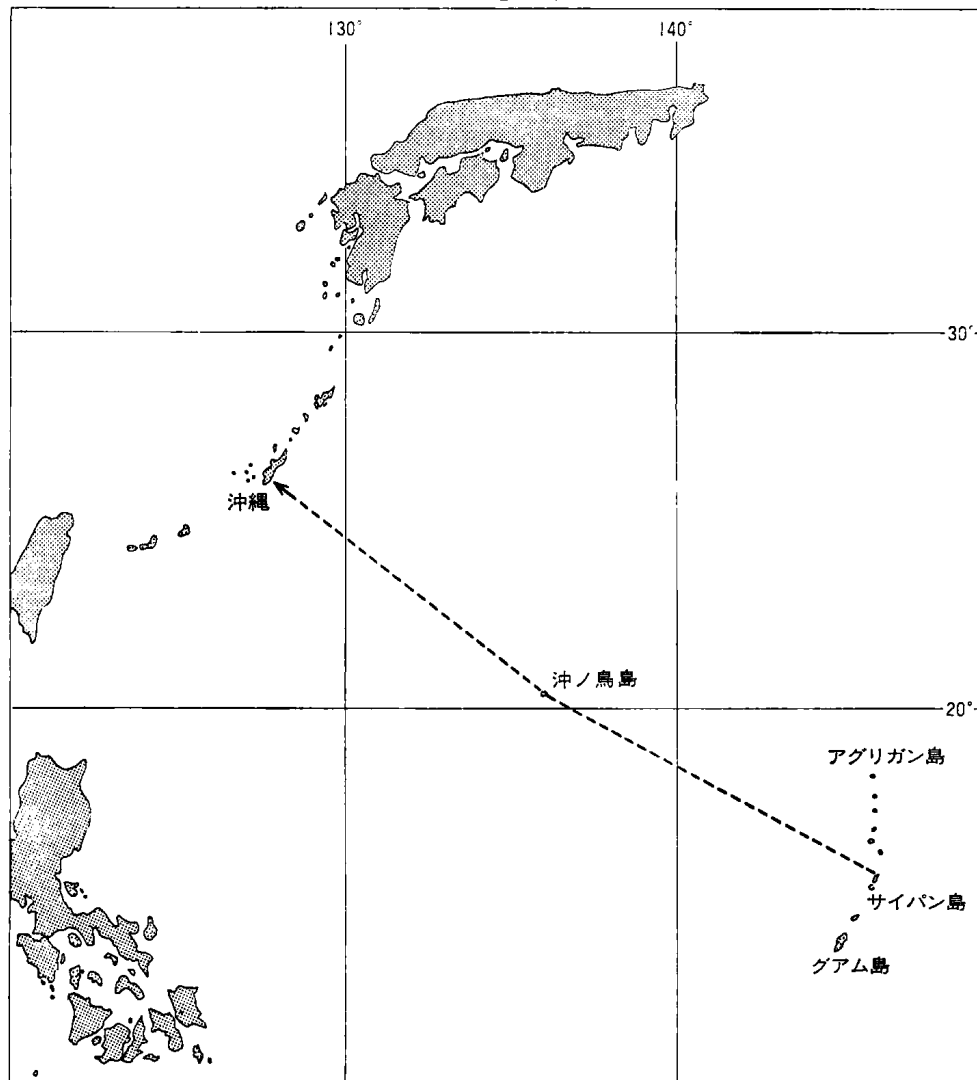
「アス ヒル 十二時に……。」

「ことばがはつきりしないよ！」

「……………」

太平洋をへだてた国際電話でことばがはつきりしないのではない。あしたからの漂流を思うと、恐ろしさに舌がもつれ、ことばにならなかったのである。

「ヘノカップⅡ世号」漂流予定コース



友人たちは、サイパンから沖繩まで二五〇〇キロを漂流する第四次実験の成功率を七対三で、失敗（一死）を七とみた。私は成功（一生存）を七とふんでいた。しかし、いよいよあした決行、となると、「はたして魚は釣れるだろうか、ボートが転覆しないだろうか」と恐怖に胸がしめつけられ、胸がいたくなってくるのだ。

第二次大戦中、アメリカの軍艦に体当たりしていった神風特攻隊員の出撃前夜も、こんな気持ちだったのだろうか……。

もともと、特攻隊員は、かた道しか燃料をつまなかつたそうだから、たとえ体当たりしなくとも百パーセント死である。私の場合は、友人たちの見方が正しいにしても三十パーセント生存の可能性がある。それなのに、胸のしめつけられる恐怖感はどうしたことだろう。

目をとじると、亡き父母の顔、兄弟の顔、お世話になった先輩たちや友人の顔、幼い日に遊んだ千葉県水郷地帯の河原や沼地や、そして釣りあげた小ブナの表情までが、あざやかに、きのうのことのように思いだされてくるのである。道端の電柱のかげの小石までがはつきりと目にうかんできた。

午後九時、ウイスキーの酔いをかりてねむる。恐ろしい夢にうなされて目がさめた。体中が寝汗でぐっしょりだ。枕もとの腕時計を見ると午前一時をさしていた。ウイスキーの酔いは、もはやさめていた。酔いで、恐怖感が麻ひしている間だけねむれたわけか。

私は、もうひとねむりを、とコップにウイスキーをそそいだ。が、飲むのをやめた。飲みすぎから二日酔い（アルコールの悪影響が翌日までのこる状態。頭痛や吐き気がする）になったらことだ。二日

酔いは船酔いのもと。船酔いは極端に体力をうばう。漂流者にとっては体力こそが資本なのだから。ねむれぬままにホテルの中庭へでる。

しばふが夜露にぬれ、椰子の葉が月光にきらめき、かなたに、南十字星が弱いまばたきをみせていた。私は素足になって土の感触、ぬれたしばふの感触をたしかめた。

サイパンから漂流始まる

十月七日（漂流一日目）。

朝から北東の風が吹きあれた。風速十八メートル。

おしよせる巨大な波が、島をとりまく環礁にぶちあたり、高さ数メートルのシブキの壁をつくる。

後ろから声がかかった。

「ああ、これじゃ出発できないね。ボート、環礁にあたるとバラバラになるよ。」

ヘイズ・イロさんだ。イロさんは第二次大戦中、日本軍の通訳をやっていた。現在は、ホテルのガイド。年齢は五十歳くらいか。カナカ族（サイパンの原住民）特有の精悍な顔つき。お相撲さんにもしたい巨大な身体なので、一見、こわいが、すごくやさしい。

出発予定の正午になっても風はおさまらなかった。

「うーん、なんとかならぬかな……。」

台風の月別平均発生数（昭和16～45年）

月	6	7	8	9	10	11	12
平均発生数	1.8	4.2	6.3	4.9	3.9	2.5	1.3

大塚龍蔵・宮内駿一共著『海の気象教室』（海文堂刊）より

たまたまサイパンへ遊びにきていた朝日新聞社会部記者の土井さんとビールを飲みながら、私がつぶやく。ことばと心は裏腹で、もつと吹け、そうすれば、出発が一日のびる。気持ちが強かった。いや、だれもいなければ、ボートにおいて、飛行機で帰っちゃおうか。という気持ちにさえなるのだ。

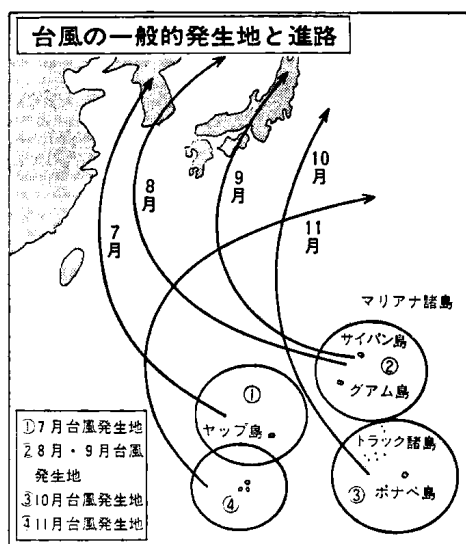
恐怖の最大の原因は台風である。十月の声を聞くと、日本に台風の襲来することはほとんどない。が、南洋では十月、十一月の二か月に五個か六個は毎年発生している。しかも、台風のコースは全部、サイパンから沖縄にかけての線上を通過する。「台風にあわない漂流実験なんて」と、その備えはしてきたものの、いざ！ 漂流となると恐怖に足がちぢんでしまうのである。

私の弱気を感じたのか、土井さんがいった。

「人間、死にものぐるいになれば、なんでもできるよ！」

じつは土井さんは、昭和四十八年、マーシャル諸島めぐりの運搬船の船員となつてビキニ島やクエゼリン島などに侵入、水爆実験でおわれたビキニの人たちを取材した。クエゼリン島ではスパイとまちがえられ、十日間もアメリカ軍の牢獄へ監禁された。

その体験から生まれたことばだろうが、これは効果的だった。ホッ、とした余裕が私の心に生じた。そして、その余裕が、前年（昭和四十九年）福井県永平寺をたずねた時の僧侶との会話を思い出させてくれた。私は、僧侶に聞いた。



「死をこわいとは思いませんか？」

それに対し、僧侶は、

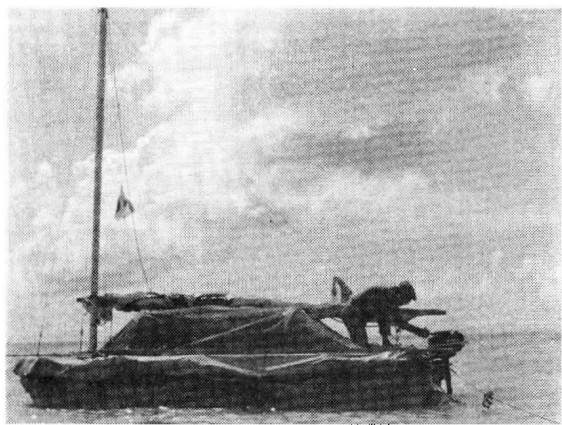
「恐ろしい。」

と答えた。

死について悟りの境地にあるはずの僧侶でさえ、「死がこわい」のなら、「私ごと凡人が死を恐れてとうぜんだ」と思ったら、それをさかいに死の恐怖感がうすらいだ。おかしなものである。そのころ、「漂流実験Ⅱ死」の方程式が心にできあがり、友人たちには、「やる！」と宣言したものの、悩みに悩みぬいていたのだ。

今また、漂流を目前にして、「恐ろしくてとうぜんだ」という平常心がもどってきた。

それで午後三時半、風の弱まったのをさいわい、一見、平然とサイパン島を出発できた。だが、心は恐ろしさにうちふるえていた。私は胸の中でつぶやきつづけた。「恐ろしくてあたりまえだ。恐ろしくてあたりまえだ」と。いわば、痩せ我慢で出発したのである。ガラパン環礁をすぎたところで船足をとめ、マリアナ海難二〇九名の霊に花たばをささげ、コースをコンパスの三〇〇度、サイパン→沖ノ鳥島→沖繩をむすぶ線にとった。行程二五〇〇キロ。はたして無事、沖



サイパン島出発直前の筆者（撮影土井全三郎氏）

繩の地をふむことができるだろうか。漂流ボート『ヘノカッパⅡ世号』のシート（セールを操作するロープ。セールとは帆のこと）を持つ手は、船名とは反対に、恐怖にちぢみがちであった。

日没、午後五時二分。

まるい水平線をかこんで巨大な入道雲がっらなり、雲の切れ目に夕日がしずんでいく。空も雲も海も、視界一面があかね色にそまり、水平線さえさだかではなくなる。南海の豪快な落日だ。

やがて、夕日が海中にぼつするや、視界は急激に暗紫色にかわり、星たちがかがやきをます。南十字星の下、波間に見えるえかくれする星くずのような光は、ホテルの窓灯りか……。

「今なら帰れる」……ともすれば生ずる弱気心をふりすて、私は、月光のかがやく水平線に向かって真一文字にボートを走らせた。

午後八時、シーアンカー（落下傘状をしたもので、水の抵抗によりボートの流れを防ぐ。本来は転覆防止用に開発された）を投じ、セールをおろし、「海水1十真水2」の混合液を一五〇ミリリットル（牛乳ビン一本は一八〇ミリリットル）飲み、食事もとらず横になる。

昨夜の寝不足と出発の心労で、すぐに深いねむりにはいった。